

正義（感）は不景気に勝てるか—コンテンツ産業（映画）で読み解

く 経済社会心理

一橋大学 保原伸弘

コンテンツ産業で生産される財（音楽、映画、出版）は、周りの経済や社会の情勢を考慮して生産されるため、その性格には周りの経済や社会の情勢や動向が反映されていると考える。そのため、その財の性質を知ることは社会心理を知る上で重要と考える。

過去に発表した、拙著日本のヒット曲性質と経済状況の関係に関する研究に続いて、同じコンテンツ産業に関する財の性質の分析として、今回は毎年日本で公開される劇場映画のジャンルやストーリーに注目し、その内容とその年の経済状況との関係に注目する。映画のいかなるジャンルやストーリーが市場で支持されているかを通じて、その期の社会心理がどのような状態であったかを知り、また合わせて、マクロ経済の動向に応じて社会心理がどう反応していたか、心理状態によって経済がどのように動いたかにメスを入れる。

具体的には、映画のジャンルはSF、アクション、恋愛、ミステリーなどいくつかのジャンルに分類することができるが、各年に支持される映画のジャンルは、その年の経済状況と無関係なのではなく、ある特定のジャンルと経済状況とが有意な相関があることが確認できた。現実肯定型のアクションとシリアスはDIと正の相関、現実逃避型のSFと恋愛はDIと負の相関であった。アクションとシリアスは現実を肯定する内容、また、SFと恋愛は現実を逃避する内容が多いことを考えれば、景気の良いときは現実を肯定する社会心理、景気の悪いときは現実を逃避する社会心理が働いていると考えられる。

次に、勧善懲悪、破恋などの映画のストーリーにも注目し、その年の経済状況との関連を調べる。経済学を支える「厚生」に対して、法学を支える概念に「正義」があるが、現実の政治、社会を見ると、正義に反する行動（政治とカネ、薬物使用、不倫など）に対する世論等の評価というのは一定ではなく、たとえば経済状況によって厳しい評価になったり、甘い評価になったりすることと考える。本稿では邦画および米国のハリウッド映画にも共通にみられる勧善懲悪という、正義がほとんど疑いもなく肯定されているストーリーを持つ映画に対する評価が景気に応じてどのように変わるか、あるいは一定であるかを考察したい。それを通じて、正義感に対する感覚が経済状況に応じて変動するのか一定であるのかについて考察する。

また、他人の幸福一緒に喜んだり、あるいは他人の不幸を自己のフラストレーションの解消の一助（≡他人の不幸は蜜の味）にしたりするのも経済状況によって異なってくると考える。本稿では他人のいわば幸福（不幸）を題材とした恋愛成就（破恋）のストーリーを持つ映画が景気に応じてどのように変わるか、あるいは一定であるかについても考察したい。